

「会員短信 52」

「秘めたる希求」

岡田廣江

私が、八木会長や堀端句会の皆様との、ご縁に恵まれたのは、母の介護中のことでした。施設スタッフの方から、萬翠荘で開催されている薔薇展に行きませんかとお声掛け頂き、同行しました。

薔薇の色鮮やかさと香りに、母と二人感動しきりの後、入り口の投句BOXに目がとまりました。無謀にも、バラの香り、色の余韻を詠んで投句しました。これが実作の第一歩。六十五歳のデビューです。

いろいろの色にときめき蒼い薔薇

介護中の私は、自分の先々のことも考える日が多々あり、心が落ち込む日は考えを一気に先に進めてみることにしました。人生の終わりが近くなった時、感謝を伝えたいが、どう伝えよう。

そう思う日々の中、八木会長主宰の堀端句会と滑稽俳句協会への入会のチャンスが巡って参りました。季語も知らず、歳時記のチョイスからの始まりでした。会報のトップに初めて載せて頂いたのは、

割り箸を折って胡瓜の馬の脚

この句で秀逸を頂いたものの、進退の繰り返し。それでも、八木先生はじめ事務局の日根野さんの温かい心配りに助けられて楽しんでおります。

そうでした！ 「秘めたる希求」とは、私の人生の感謝を伝えること。それは、「ありがとう」を俳句にして残していくことだと気付きました。

希望達成のその日まで、滑稽俳句協会報で皆様の俳句にお会いし、鑑賞させて頂き、心豊かに過ごしていきたいと思っております。